

氏名	佐々木 茂 人
学位の種類	博士 (文学)
学位記番号	文博第 277 号
学位授与の日付	平成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	文学研究科 文献文化学専攻
学位論文題目	もうひとつのユダヤ性 ——カフカと東方ユダヤをめぐる考察——

論文調査委員 (主査) 教授 西村 雅 樹 助教授 松村 朋彦 教授 佐藤 昭裕

論 文 内 容 の 要 旨

カフカとユダヤに関する従来の研究は、カフカがユダヤ性を自覚するきっかけとして、彼と東欧のユダヤ人劇団との出会いを強調する一方で、その出会い以降は、劇団に象徴された東欧のユダヤ人のユダヤ性をユダヤの伝統一般と同等に扱っていた。しかし、カフカが、東欧のユダヤ人ないしはその文化 — 東方ユダヤ — に対して特権的なユダヤ性を認める傾向は終生変わらず、また、彼が東方ユダヤと接点を持つのは劇団との出会いに限られなかった。本論文は、こうした前提にもとづき、東方ユダヤとの関わりからカフカのユダヤ性の問題を捉え返す試みである。

議論の土台として序章では、東方ユダヤをめぐる言説を歴史的に概観した後、カフカが東方ユダヤに触れる最初のきっかけとなった劇団との出会いを再構成し、これまでの研究の問題点を検証する。

ローマ軍の第二神殿破壊によってユダヤ人は世界各地へ離散した。後にドイツ語圏において東方ユダヤ人と呼称される人々は、かつて中欧から東欧へと移住したアシュケナージ系のユダヤ人であった。彼らは十字軍遠征の際に生じた迫害などを逃れてポーランドへ移り住み、そこで王侯の庇護のもとに独自の文化を發展させた。ポーランドの分割以降は、彼らの多くがロシアに取り込まれ、一定の居留地に隔離されたが、1881年のロシア皇帝暗殺後に起きた大規模なポグロムにより、難民となって他のヨーロッパ諸地域へ流入した。

難民の流入以前のドイツ語圏では、啓蒙主義の洗礼を受けたユダヤ人たちが、東欧出身のユダヤ人たちを「啓蒙」の対象と捉えていた。ところが、難民の流入がはじまる頃には、彼らを自分たちとは別の民族とする見方が定着していた。そのため、当初は難民への同情も見せたドイツ語圏のユダヤ人たちも、後には難民を特定の居住地に押し込める政策に異議を唱えなかった。また、第一次世界大戦時には、東方植民をねらっていたドイツ＝オーストリア軍部によって東欧のユダヤ人たちはイデオロギー的に利用された。

こうした東方ユダヤをめぐる言説は、同じドイツ語圏に属していたプラハには当てはまらないと考えられる。当地には東欧のユダヤ人の居住区がなく、また難民がなだれ込むこともなかった。これは、カフカと東方ユダヤとの関係を考える上で重要な意味を持っている。というのも、プラハには東方ユダヤ人に対するイデオロギー的な偏見が生まれる土壌がなく、カフカも東方ユダヤに特権的なユダヤ性を看取することができたと考えられるからである。

1911年10月、友人に誘われたカフカはある酒場で東欧のユダヤ人劇団の舞台を観た。それは、東欧のユダヤ人の通用語、イディッシュ語を用いて創作された演劇 (イディッシュ演劇) を上演したものであった。その舞台装置は乏しく、舞台に掛かる戯曲の質も劣っていたが、カフカは感銘を受け、その日から毎日のように観劇した。日記には舞台の印象等を事細かに記し、劇団の俳優たちとも親交を深めた。この体験以降、カフカはユダヤの歴史、文学、文化へと関心を示しはじめる。

カフカが演劇に魅せられた理由は、舞台を通じて、彼らとの間にある種の交感が持てたからだと推察され、この交感とはとくに俳優たちの唄を聞く際に生じていたと考えられる。もっとも、その唄を細かく分析するカフカは、交感の成立条件そのものを制限してしまったといえる。これがひとつの原因となり、後にカフカは演劇に対する感受性を失うと共に演劇から距

離をとるようになる。東方ユダヤとの出会いによってカフカはユダヤ性を自覚したが、それはあやういバランスの上によく成立する交感であった。それゆえ、劇団との出会い以降にカフカがユダヤ的なものに関心を示すとしても、東方ユダヤとユダヤの伝統一般を同等に扱うことはできないのである。

続く第一章では、カフカがイディッシュ演劇体験にもとづいて形成した東方ユダヤ観を再構成し、当時プラハで活動していた学生シオニスト組合の東方ユダヤに関する言説と比較する。

プラハに居住するユダヤ人の子弟は、親ドイツ的な傾向からドイツ系の大学に進学し、その学生組合に所属していた。しかし、19世紀にドイツ民族主義運動が興ると、ドイツ系の学生組合はユダヤ人学生の排斥をはじめた。これに対抗して、ユダヤ人学生の間においても自分たちの学生組合を設立する動きが見られるようになった。当初は規模も小さく、テオドル・ヘルツルの主導する政治シオニズムの強い影響を受けていたが、1899年の「バル・コクバ」設立によって独自のシオニズムが花開いた。

バル・コクバが方針として掲げたのは「今ここでの活動」である。これはアハド・ハーアームというロシアのユダヤ思想家に由来する。パレスチナをユダヤの精神的中心地として移住以前に自分たちの文化を創生するというものであった。バル・コクバのメンバーは直接その思想に触れず、マルティン・ブーバーらの著作を介して受容していた。そのため、バル・コクバの「今ここでの活動」には、ブーバーらの思想的色合いが付加され、パレスチナを精神的支柱として認めるものの、現在の居住地におけるユダヤ人の社会的境遇の改善も進められた。この方針に従ってバル・コクバは、さまざまな文化的催しを企画し、またユダヤ人の民族的権利を公に承認させる運動を展開した。

バル・コクバにとって東方ユダヤとは、第一にイデオロギー的に利用される対象であった。カフカの友人であり、初期バル・コクバの牽引役を果たしたフーゴー・ベルクマンは、当時ブーバーが唱えていた思想に感化された。それは東方ユダヤにユダヤ文化の再生を見るという立場であった。ベルクマンはブーバーの評論を読むとすぐに東欧のユダヤ人の居住地へ赴き、プラハに帰ってからはその文化を広めるのに心血を注いだ。東西のシオニストの協調を目指して協会も設立するが、資金難と立場調整の難航からわずか数回の会合をもって活動は停止した。

だが、ベルクマンの方針はその後のバル・コクバの活動に受け継がれた。もっとも、東方ユダヤに対するスタンスは時期によって異なった。とくに1910年にブーバーが講演に招かれてからは、従来のように東方ユダヤに保持されたユダヤ性を強調するのではなく、西方ユダヤのユダヤ性の強調へと方向転換が行われた。東方ユダヤ人の生活を土台とする文化活動を称揚していた運動家ナタン・ビルンバウム思想も、組合の方向転換に沿う形で読み換えられて受容された。

カフカは折に触れて劇団員から話を聞き、自分の属するプラハの共同体について内省していた。文学にまで及んだ省察によって、彼は作家としてのスタンスをも自覚するようになった。周囲のシオニストたち同様、カフカにも東方ユダヤを利用して自分のユダヤ性の再生を図る考えが見受けられたが、1912年に突如として演劇に対する感受性を失ってしまい、東方ユダヤに対して距離感も生まれた。ユダヤ性に対して終生続くアンビヴァレントな姿勢を生み出した原因は、ユダヤへの関心が目覚めた矢先に、それを促した東方ユダヤに対して距離感を抱いてしまったことである。

第二章では、関連する従来の研究を批判的にたどりながら、カフカ作品と彼が触れたイディッシュ演劇、そしてイディッシュ語詩とを比較し、これまで考察されていない両者の相違点について検討する。

カフカ作品とイディッシュ演劇の関わりについて論じた研究は早くから現れていたが、1970年代初頭にそれらを包括するモノグラフが公にされた。アメリカの研究者ベックによる『カフカとイディッシュ演劇』（1971）である。この研究では、カフカの観た12の戯曲と彼の作品が詳細に比較され、数多くの類似点が挙げられている。現在においても基本文献と位置づけられているが、これまで検証されることはなかった。

ベックによって影響関係が最も顕著とされる、ゴルディンの戯曲『神と人間と悪魔』とカフカの『判決』（1912）を検証すると、確かに多くの類似点が見られた。これらの類似点の存在を前提にして、二つの宗教的なモチーフを手がかりにさらに考察を進めると、カフカの作品からは戯曲に見られる宗教的側面が欠けているのが分かった。

次に、ローゼンフェルドの詩を何篇か取り上げ、カフカの『失踪者』（1912-1915）と比較した。こちらの場合では、モチーフの連関ばかりか、当の詩人の生活空間までもがカフカの物語に組み込まれている様子が明らかになった。しかし、ゴルディンの戯曲と『判決』を比べた場合と同じように、モチーフの構造は類似するものの、詩に見受けられた宗教的側

面は物語から払拭されてしまっていた。

その原因を考察すると、カフカの創作原理が浮かび上がってくる。カフカは自身による『判決』解釈を日記に記しているが、そこにも作品の宗教的側面に関する言及はない。そもそもカフカには宗教的側面を書き込む意図がなかったといえる。執筆したカフカ本人にとっては、いくら変形されようともモチーフの由来は明らかなのである。変形の諸相を考察して浮かび上がったのは、先の章で論じた、イディッシュ演劇に対する感受性が失われたときと同じ構図であった。カフカは東方ユダヤに対するアンビヴァレントな姿勢を描くために、宗教的側面を削除したのである。

第三章では、第一次世界大戦時にブラハへ押し寄せた東方ユダヤ人難民と彼らへの支援活動を、カフカの視点から再構成し、カフカの晩年までの東方ユダヤ観を提示する。

1914年9月からブラハへ流入しはじめた難民は、最大時で4000人を数えた。彼らの食事、衣類その他について支援したのはブラハのシオニストであった。カフカの友人プロートも家族ぐるみで援助にあたり、プロート本人は急遽設立された「青空教室」において難民の少女たちに世界文学の講義をした。カフカはこれらの活動に関心を持っていたが、周囲とは違った観点から難民問題を捉えていた。彼は、自分たち西方ユダヤ人こそ東方ユダヤ人に影響されるべきだと考えたのである。

折りしも、難民と彼らを支援する側であった西方ユダヤ人の間に、さまざまな論争が生じた。前者は、西方ユダヤ人には宗教性が欠けると説き、後者は前者に対して西欧の文化を摂取するようにと勧めた。論争は統一的な見解を生み出さぬまま終わったが、そこには一つの折衷案が暗示されていた。それがプロートらの携わった教育機関における活動である。ここでは東方ユダヤ人の宗教的慣習に一定の配慮が払われ、また世俗的な学問の教授によって、西欧の文化も伝達されたのだった。これに先のカフカの見解を並べると、カフカはきわめて独特な考えを持っていたことが分かる。

東欧からはハシディズム（ユダヤ敬虔主義運動）の権威であるレベも、戦火を逃れてブラハの近くまで来ていた。カフカは少し前に親しくなったゲオルク・ランガーという人物の仲介によって、これらのレベに接する機会を得た。また、この頃カフカは恋人のフェリーツェ・パウアーに東方ユダヤ人の施設「フォルクス・ハイム」をしきりに勧めていたが、晩年にはその施設との交流も実現された。カフカがベルリンに移住した背景には、当地にこの施設があった事実があったと考えられる。

病身のカフカにベルリン移住を敢行させたのは東方ユダヤ人になりたいという憧憬であった。アンビヴァレントな想いを抱え続け、また父親からユダヤ教を伝達されなかったカフカにとって、ユダヤ人であることはいわば実存的な苦しみであった。そうした障壁を超越する想いは畢竟憧憬とならざるを得なかったのである。

第四章では、従来の研究を手がかりにして、カフカの中期から後期にかけての作品とハシディズムの物語を比較し、その相違の問題について考察する。

カフカがハシディズムの物語に接したのはイディッシュ演劇体験時にさかのぼる。同じ時期に「食べるように」読んだピネの文学史には、カフカの『掟の前』と『掟への問い』と関連する物語とその注釈が載せられていた。イディッシュ語作家イツホク・ライブシュ・ペレッツの短編とその解説である。しかし、従来の研究ではその大まかな類似が論及されるに過ぎなかった。ペレッツの物語の原典にあたることによって、カフカがハシディズムを批判的に読み換えたことが明らかになる。

第一次大戦時には、さまざまなイディッシュ文学の翻訳が出版され、そのいくつかにかフカは触れていた。彼の中期短編『田舎医者』には、そうした物語との顕著な類似が見られる。しかし、類似性に相反して、カフカが意図的に変形したと考えられる箇所も多く、この問題をめぐってはこれまで議論がなされてきた。従来の研究を批判的に扱い、二つの作品の比較に即して物語を分析すると、これまでとは異なった読みが可能となった。そこから浮かび上がったのは、カフカが歪められたハシディズムの力によって試練を受ける男の姿を描いたということであった。

カバラ研究者グレーツィンガーは、ヘブライ語とイディッシュ語の文献を手がかりに、カフカの動物譚から「魂の輪廻」を読み取った。それは、ルリアと呼ばれるカバリストによって構想された世界観に由来する思想である。世界が創造される際に四散したアダムの魂は解放を求めて輪廻する。この思想は、ハシディズムの物語に借用されると、前世の罰を負う人間と救済を求めて屠殺されようとする動物の形象を取った。グレーツィンガーは『雑種』とシナゴークに住み着いた獣の物語を挙げ、罪が解放されない魂を読み取っている。しかし、その論を多角的に検証すると、カフカは罪が解放されない原因をそれぞれ別の契機に読み換えているのが明らかになる。

いくつかの物語の比較を通じて明らかになるのは、カフカが東方ユダヤ的なものを否定的に読み換える諸相であるが、それは外的な対立を示唆するものではない。『掟への問い』、『田舎医者』、『雑種』、シナゴークに出る獣の物語、いずれにおいてもその物語世界では東方ユダヤ的な要素が統合されている。主人公は東方ユダヤ的なものの不可解な表出に驚かず、それを自明なものとして受け入れている。カフカはハシディズムの物語を取り込み、創作において交感を図っていたのである。

カフカは、イディッシュ演劇体験を通じてユダヤ性を自覚すると同時に、ユダヤ性に対してアンビヴァレントなスタンスを取るようになった。それは、当時彼の周囲で称揚されていた、ナショナリズムを支える言説としてのユダヤの伝統に批判的な立場を取ることも意味した。カフカのテキストは、ともすればナショナリズムに陥りやすい伝統をめぐる言説に対して批判的視座を含んでいると考えられるのである。

論文審査の結果の要旨

フランツ・カフカ（1883-1924）は、ドイツ文学研究の分野で、現在もっともよく論じられる作家の一人である。さまざまな成果が著されているうちで、近年目につく動向の一つに、カフカのユダヤ性をめぐる議論がある。そこに共通するのは、カフカ受容の初期から見られたユダヤ教に基づく解釈の方向をとるにせよとらないにせよ、カフカの作品を、彼が関わったユダヤ関係の文化的事象と照らし合わせて捉え直すという傾向である。なかでも注目されるのは、イディッシュ演劇との比較を行ったベックの著作、カフカとユダヤに関するバイオニならびにロバートソンの包括的な研究、カフカとユダヤ神秘主義の関係をはじめとするグレーツィンガーの一連の研究である。

このような先行研究の成果を受け継ぎ、論者はそれをさらに展開させようとする。論者は、従来の研究ではユダヤの伝統一般に還元されそれとの十分な区別がなされなかった、西欧文明に同化しない東方のユダヤ人のユダヤ性を、カフカにとっての「もうひとつのユダヤ性」と捉え、このユダヤ性へのカフカの二律背反する関心を読み解こうとするのである。その際論者は、基本的には先行研究に依拠しながらも、それを無批判には受け入れず、カフカ存命中に発行されていた雑誌等の一次文献に当たって、できるかぎり自らの目で確認する姿勢をとっている。

序章では、まずカフカとユダヤ性に関する研究史の概略が記されている。それに続いて、東欧のユダヤ人の歴史ならびに東方ユダヤをめぐる言説が概観され、さらにカフカが東方のユダヤに触れるきっかけとなった劇団との出会いが記述されている。従来の研究では、この出会い以降カフカは東方ユダヤに関心を抱き続けたとされているが、論者は、その関心には揺れが見られることを、カフカの日記等に基づいて検証している。

続く第1章では、カフカの友人たちが加盟していたユダヤ人学生組合「バル・コクバ」の東方ユダヤ観と、カフカのそれとが比較されている。パレスチナを精神的支柱とはするものの、現に居住する土地での社会的状況の改善を求め、文化的催しをも重視した「バル・コクバ」のメンバーにあっては、東方ユダヤは、自分たちの再生をはかるために利用される対象であったのに比べ、論者の見るところ、カフカの関心のあり方は、はるかに個人的、内省的であった。この比較を行うにあたって論者は、「バル・コクバ」の機関誌『自衛』やこの団体に影響を与えた思想家の著作を十分利用している。

第2章では、東方ユダヤ人の使用言語であるイディッシュ語の戯曲と詩を、カフカが初期の作品においてモチーフとしてどのように取り入れたかということが検証されている。ゴルディンの戯曲『神と人間と悪魔』がカフカの『判決』と対比され、ローゼンフェルドの詩とカフカの『失踪者』が比較されている。論者は、『カフカとイディッシュ演劇』の著者ベックの研究成果を批判を交えながら受け継ぎ、上田和夫によるイディッシュ詩の先行訳も参考にして、カフカの作品においては、影響を受けたとされるイディッシュ語の作品に見られる宗教的要素が払拭されモチーフが変形されていることを丹念に跡づけている。

第3章では、第一次世界大戦勃発に際してプラハに流入した東方ユダヤ人難民への支援活動に対するカフカの関心のあり方を通して、この時期のカフカの東方ユダヤ人観が探られている。流入してきた難民とプラハのユダヤ人の間で交わされたシオニズムやユダヤの風習をめぐる論争、難民のために急遽設けられた教育施設等の実態が、当時の雑誌記事等に基づいて明らかにされている。

第4章では、東方ユダヤ人の敬虔主義運動ハシディズムで伝承された物語が、カフカの中・後期の作品に与えた影響が検証されている。グレーツィンガーの研究をはじめ先行研究の成果も参考にして、論者は、カフカがハシディズムの物語をあ

えて変形して取り入れたことを跡づけ、そこにカフカの東方ユダヤに対する二律背反的関心を読み取っている。これまでカフカ作品との類似は指摘されながらも詳しい分析はなされなかった、イディッシュ語作家ペレッツの短編そのものを読み込んで論を立てているのは高く評価できる。

最後にまとめとして、東方ユダヤへのカフカの二律背反する態度からは、彼の周囲に見られたユダヤ民族主義的傾向に対する批判的観点を読み取ることができると結論づけられている。その観点が持つ意味合いをさらに掘り下げて考察していくことが、論者には今後の課題として求められるであろう。

論者はこの研究を進めるにあたり、『自衛』誌等、海外の一部の図書館でしか閲覧できない文献について外国での資料収集を行い、イディッシュ語の入手しがたい書物を探索する労も重ねてきた。その成果は、この論文に十分に反映されていると評価できる。ただし、苦勞して手に入れた資料を生かそうとするあまり、一部の章において、この論文のテーマからすると記述がやや煩瑣にすぎると思われる箇所が見られるのは、問題点として指摘しうる。しかしこれは本論文の価値を大きく揺るがすものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2004年2月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。